# 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スミスのいわゆる「初期未開の社会状態」について
Sub Title	On Smith's "early and rude state of the society"
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.4 (1954. 4) ,p.366(36)- 400(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19540401-0036
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540401-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

那 大 嚴

- ースミスの本文
- 二 價値法則における歴史と論明
- 三 批判[—— 超越的
- 四 批判()——內在的

----

彼の後繼者たちがそれぞれたがいに對立して、 しかし彼自身が矛盾することによつて、それらを明示している。この點にかんする彼のただしい もつともよく證明されているのである。」、註こ あるときは一つの面を、 重要である。 またあるときはもう一つの面をとり

まここにとりあげられるスミスの矛盾は彼の價値論中にみられる矛盾である。 しかもそのすべてではなくして

にこたえたのち、第六章の冒頭において、彼は一 とくに價値法則の適應性にかんする彼の矛盾した見解である。『國富論』第一篇第五章において、彼自ら提起した價値 そして價値法則の適應しうる段階はあたかも「初期未開の社會狀態」であるかの如くに措定される。 一の課題、「交換價値の真實の尺度は何であるか、 いと考えられる價値法則の適應性の問題がここにはじめて展開される。 - 一見したところ-換言すれば、 すべての商品の眞實價格は何に存するか」、註こ - 價値法則の現實の社會への適應性 を 否 定 す ふるくし

の、または、二時間の勞働を要する物は、その生産に通例一日のまたは一時間の勞働を要する物の二倍の値をもつこ 例えば、狩獵民族の間で一頭の海狸を殺すには二頭の鹿を殺すだけの勞働が通例必要であるとするならば、一頭の海 は當然に二頭の鹿と交換されるであろう、あるいは二頭の鹿の値あるものとされるであろう。その生産に通例二日 れる勞働量の間の割合は、これらの商品を相互に交換するための定規となりうる唯一の事情であつたと思われる。 く「資本の蓄積と土地の私有とに先立つ初期未開の社會狀態においては(in that early and rude state of society both the accumulation of stock and the appropriation of land)、種々の商品を得るために必要とせ

かくの如き事態においては、勞働の全生産物は勞働者に屬する、そしてある商品の獲得または生産に普通に要する 通例その商品を以つて、購い、支配し、またはそれと交換せられる勞働の量を律しうる唯一の事情であ

このようにして「初期未開の社會狀態」においては、價値法則が行われる。 ち勞働の生産物は、 スミスの言葉をかりれば 「勞働の自然的報酬」 同時にまた勞働の生産物が全部生産者 自然的賃銀」を

スミスのいわゆる「初期末開の社會狀態」につい

三七(三大七)

帯戏する。

されていないために、ここに商品の價格は賃銀、利潤及び地代によつて構成されるとの見解、 しこのような狀態は資本がひとたび特殊な人々の手に蓄積され 資本の所有者は利潤を要求し、 利潤及び地代にも分解する。 然價格とは、それを構成する賃銀、 利潤及び地代がいずれも自然率〔=普通率又は平均率〕 土地の所有者は地代を要求し、したがつて勞働の生産物あるいはその價格 しかるにスミスにおいては、 また土地の私有が行われるようになるとゆる 價格の分解と價格の構成とが明確に區 のちの自然價格論

別に追加量が支排われなければならないことはいうまでもない。」(誰四) 生産に普通に要する勞働の量は、 「事態がかくなると、 彼は彼を傭うところの資本の所有者とこれを分割せなければならない。また、こうなれば、 **勞働の全生産物は必ずしも勞働者に屬するとはかぎらないことになる。多くの場合にお** 賃銀を前排し、その勞働の原料を供給したところの資本の利潤にたいしてもまた、 通例その商品を以て購い、支配し、またはそれと交換される物の量を律しうる唯 ある商品の獲得また いて

働價値說は投下勞働價値說を暗默のうちに前提している。蓋し價値の外 もこういえない面もあり、 て投下勞働價値說は、これを投下勞働量=支配勞働量であるかぎりにおいてのみ維持している。 云えばこれもあやまりで、 價値尺度のみを問題意識する立場から、支配勞働價値說はこれを終始一貫させ、したがつ 支配勞働生産物量というべきだ。 むしろその面にこそスミスの偉大さがあるのだが、この點はのちにふれる。それに支配勞 値の内在的尺度としての投下勞働量を前提し 的尺度としての支配勞働量 もつとも必ずし んみつに

いるからである。 更に土地の所有によつて地代というあたらしい所得形態の成立ともなれば、 (そもぞも價値の外在的尺度は內在的尺度の外在化) い所得形態の成立によつて、投下勞働量=支配勞働量でなくなれば、價值法則は維持されが したものでしかない。) したがつて資本の蓄積 が 一層そうなるであろう。 行

地代を構成する、そしてそれは多くの商品の價格において、第三の構成部分をなすものである。(註五) 生産物を採取するための許可にたい 部分を地主に引渡さねばならない。この部分、もしくは、 た場所で收穫することを好み、その自然的な生産物にたいしてすら地代を要求する。 「ある國の土地がすべて私有財産となるやいなや、 して代償を拂わねばならない、そして彼の勞働が採取し、 地主もまたすべての他の人々と同じく、 これと同じことではあるが、この部分の價格は、 あるいは生産し 彼等がかつて蒔かな 土地 た物の

値を尺度するばかりではなく、 スにおける勞働と賃銀との混同の重要いぎについては後論。-されるものであることは、ここに注意しておかねばならぬ。すなわち、 かくしてスミスにおいては、奇妙な仕方で、價值構成說(生産費説)が支配勞働價值說と結合されることとなる。 格の各種の構成部分の眞實價値は、それらの構成部分が、その各々が、購買しまたは支配しうる勞働の量で尺 地代に分解する價格部分、 ―遊部註、以下Aと略記す。」に分解するところの價格。部分の 利潤に分解する價格 部分の價値をも尺度するのであ 勞働は勞働 八正しくは賃銀とすべきである。

このようにみてくると、スミスは價値法則の妥當しうる段階として「初期未開の社會狀態」を措定したかのように なお第八章賃銀論の冒頭においても勞働の生産物からの利潤と地代との控除がのべられている。 したがつて現實の資本主義社會におい ては價値法則は放逐され これに代わつて自然價格の法則が作用 して

スのいわゆる「初期未開の社會狀態」について

三九(三六九

いるとのべられているかのように見える。 マルクスのつぎの文章も 一見かくの如き解釋をゆるすかのようである。

それにふくまれている勞働時間によつてはかられていた、と。」(誰も) **真質だと思われるものが、單** てだけあい對しあつていたにすぎなかつたブルジョアたちのうしなわれた樂園(paradise lost) では、諸商品の價値は、 この價値規定の現實性をアダム以前の時代へと、 「アダムはもちろん、 賃勞働者、土地所有者、借地農業者、高利貸等々としてではなく、ただ單純な商品生産者と商品交換者とし 彼にははつきりしなくなるのである。 商品の價値をそれにふくま わりに、資本、賃勞働、地代等々の、より高度でより複雑な諸形態があら おしもどしている。 れている勞働時間によつて規定するが、そのあとではふたたび、 このことを、 いい 彼はこう表現する。すなわち、人間 かえれば、單純な商品の立場からみて彼に がまだ

**うであろうか?** しかし、このような解釋はスミス自身にそくした場合ただしいであろうか? これらの點を次節以下においてみるとしよう。 また右のマルクスの典據の眞意はど

(起一) K. Marx; Theorien über den Mehrwert, herausgegeben von K. 國民文庫、一八六頁。以下 Theorien 公略稱。 Kautsky. Bd. I. 1923, S.

30. 大內兵衞氏譯、第一分册、六五—六頁。以下 Wealth と略稱。 A. Smith; An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations. edited by E. Cannan.

(註三) ib. pp. 49-50. 譯、第一分册、一〇〇一

(註四) 一〇三—四頁。

(註五) p. 51. 譯、第一分册、 一〇四頁。

な 括 ے' の旬につい ては、 Bd. II. Tl. 2.

ib. Bd. III. SS. 18-9. 林婴氏等譯、三五頁參照。

(祖中) K. Marx; Zur Kritik der politischen Ökonomie. Volksausgaabe besorgt vom M-E-L-Institut. 1934. S. 國民文庫譯、六一頁。以下 Kritik と略稱。

リンがその著『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』のなかで確認しているように「價値法則 商品生産の法則である。」(註八) なに

(商品交換は交換の對象の私的所有を前提する。)しかるに次第に外部的交換は共産體內部にも反射的に行われてくるにつれ す交換の對象とされた。 勞働量によつて規定された價値の大きさを基準とする交換が行われる。 ひいては共産體の崩壞をもたらしたとみられている。 かるに商品生産は一個の經濟制度である。だからさまざまの社會經濟的構成に存在している。それの最初 「商品と商品生産とがあるところには、價値法則もないわけにはゆかないのである。」(註九)いわば投 うのは私的所有のみとめられぬ共産體の内部には交換もまたみとめがたいからである。 れた。商品交換ははじめ共産體と共産體との間にみられた。共産體の剩餘生産物がま じらい、商品生産は古代社會、封建社會を通じて次第に發 0)

値法則の適應性について經濟學史上、もつとも徹底した見解を表示したものは、 「富の生産に關する一論」(一八二一年)において 「初期未開の社會狀態」につい - 社會發達の三段階すなわち 日商品生産の バー トレンズである。

(ヨセー)

未開且つ原始の狀態においては、交換價値を規制ないし規定する一定の基準は存しないであろう、 々交換の條件は、それぞれひきつづいておきる場合において、 避的に行われ、これにもとずい すなわち第 巨勞働者及び資本家への階級分化以後の三段階を劃して、 一の段階においては、たしかに改良と人口の増進との結果、分業と私有財産の て生産物の交換が行われる。しかし分業の恒久的確立に先立つ、「かかる 契約當事者の目前の缺乏と欲望とによつて規制される 價値法則の作用したの ときおり生じた物

しかるに第二の段階においては事態はいちじるしく變化する。

るであろう。 の鹿を一日の勞働と引換えに取得するであろう。分業が雙方に相等しい利益をさずけるまで乙は甲の要求に讓步す 一日の仕事と交換に全一匹以下の鹿をうけとるのを肯じないであろう。蓋し、もしもこのような不平等な條件を乙 「交換の頻繁なことが恒久的な分業を結果しはじめるや否や、事態は相異つたであろう。」(註一こかかる社會狀態に て は、各人は特殊な職業に從事し、彼の勞働の剩餘生産物とひきかえに他人の勞働の生産物の一部分を獲得しう 甲が弓矢を用意し乙が狩場へ行くとすれば、彼等は一日に三匹の鹿を捕殺しうる。 甲はむしろ分業を解消して自ら獵を行つた方が有利であろうから。 も二人の野蠻人の獵師が分業のないために自ら弓矢をも用意するとすれば、 な、この場合、甲は一匹 一日に一匹の鹿

くして我々はみる、 々が特殊な職業に専念するやいなや、 を決定するということを。 共同體が資本家階級と勞働者階級とに分かれる以前には、 分業から結果する利益に參與する競爭が、 彼等のそ かか

の勞働の生産物と交換されるであろう。」(註二) **争は支出された全勢働量にもつぼら依存する、** ーつの 職業に おける一日の勞働の生産物は 他の職業に

量を錦極的に決定するところのものである。」(註一) ころのものであり、 を遂行する初期の社會においては、生産に支出された蓄積勞働及び直接勞働の總量が、比較と競爭とを左右すると 「共同體の資本家階級と勞働者階級とへの分裂に先立ち、一産業部門を擔當する個人が彼自身の勞 また交易あるいは販賣取引において、一定量の他の商品とひきかえに受取られるべき一商品の敷 トレ ンズによれば -直接勞働のみならず、資本に體現されて いる蓄積勞

る勞働生産物のうちはじめから交換の目的で生産されるものの比率が增大していく。使用價値に分裂が生じ、社會的 用價値の誕生となる。すなわち他人のための使用價値を目的としての生産が行われる。 したのであつて、それはそれ自體としてはただしい見解である。商品生産の最初期におい ンズはかように價値法則の適應性を資本主義社會以前の商品生産、しかも社會的分業の確立以後の商品生産 價値との分離が行われていくにつれて、交換比例の生産そのものへの依存が、かくして價 かれこれするうちに、勞働生産力の增大はしだいに社會的分業を確立させていき、 大きさが商品の交換比率を調整するのだということが、 わゆる「契約當事者の目前の缺乏と欲望」によつてそれは規制されざる (「全體的 明かになる。」(註一四) 勞働生産物における使用價 ・價値形態」)において 値法 則の貫 社會におけ

、スのいわゆる「初期未開の社會狀態」について

四三(三七三)

社會においても、 價値法則は資本主義生産様式成立以前まで商品交換比率を規定するものとして作用してきた。いな資本主 社會主義社會におけるとでは價値法則の作用のしかたが相異るが……) さらに社會主義社會においても商品生産の行われている範圍內で價値法則は 作用してきた。

にはエンゲルスの結論のみを引用しておこう。 手工業者間に行 スがその われた商品交換が價値法則にもとずいて行われたことをしるしていることは周知の如くである。ここ 『價値法則と利潤率』において彼の少年時代の見聞をもまじえて一九世紀ドイツにおいて農民や

一部第一篇でのべられているような價値法則の種々の側面が自己を主張する多様な諸關係が發展し、 つさて、 、 そのもとでのみ勞働が價値形成的であるような諸條件が發展した。…… 勞働時間によるこうした價値規定から出發して全商品生産が發展し、それとともに、そこでは『資本論』 したがつて殊

かるに、 らく五千年にさかのぼり、 生産物を商品に轉化する交換の端初から紀元一五世紀までの期間にわたり、 一言でいえば、マルクスの價値法則は、いやしくも經濟學的法則が妥當するか つまり單純商品生産が資本制的生産形態の登場によつて變更をこうむる時まで、 商品交換は、 したがつて、 ない比較的長期間の平均價格が、等閑に付すべき限界内で價値と一致する。だからマルクスの價値法則は、 單純な商品生産が充分に發展すればするほど、それだけますます、 いつさいの書かれた歴史以前に横たわる時代 マルクスの法則によつて規定される價値の方へひきつけられ、 バビロニアでは紀元前四千年おそらく六千年にさかのぼる時代 エジプトでは少くとも紀元前二千五百年おそ 經濟學的・一般的な妥當性を有する。 ぎり、 この價値をめぐつて動揺するの 一般的に妥當する。 單純な商品生産の全期間 外的な暴力的攪倒によつて からのものである。 その にわ

則は五千年ない 六千年の期間にわたつて支配的に行われてきた。」(註一五)

スがその論文中で 「決定的な章句」 として引用する 『資本論』第三卷中の 文には次の如く しるされて

必要である。 「その價値またはほぼその價値での諸商品の交換は、生産價格での交換 の場合よりもはるかに低い段階を要求する。 そのためには一 定高度の資本制的發展

業者の場合にみられる。 するのであつて、こうした狀態は、古代世界でも近代世界でも、 だから、價値法則による價格及び價格運動の支配は別として、商品の價値を理論的にのみならず歷史的にも生產價 の先行者とみなすことは、まつたく事態適應的である。このことは、 また手工業者の同職組合組織にも……妥當する。」(註一六) ……それは、……原始的狀態に妥當するのと同様に、 みず から勞働する土地所有農民の場合、 生産手段が勞働者に屬するような狀態に妥當 奴隷制および農奴制にもとずく後代 および手工

は小商品生産の範圍内にせまくかぎられていき、これにとつてかわつて「平均利潤率の法則」が支配的に作用するよ うになる。 だが封建的生産様式が資本主義的生産様式によつて打倒され、 て支配的となればなるほど、 すなわち社會的必要勞働時間による價値規定は一方では社會的價值以上の個別的價値で商品を生産する零細 もちろん封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行過程において價値法則はきわめて重要な役割を 各生産部門間における資本の競爭を媒介とする利潤率の 他方では社會的價值以下の個別的價値で商品を生産するものをして特別剩餘價値を た(註一七)。 これによつて 後者の支配がすすめばすすむほど、 資本主義生産様式が國民經濟的規模に 均等化による生産 價 格 の作 0

四五 (三七五)

スの

「初期末開の社會狀態」

そもそも社會的價値(市場價値)の成立をもたらす同一生産部門內部における競爭は生産價格の成立をもた の競争にたいして歴史的に先行している。 への轉化がもたらされざるをえない。 そのようないみで價値は生産價格の歴史的先行

兩者の取扱われている位置を想起せよ。) 値法則を前提しなければ理解しえない。また生産價格の運動のみならず、 的諸要因の數量的運動の全範圍を決定するといういみで たとえば生産價格を構成する費用價格と平均利潤とのいずれをとつてみても、 ルクスの文章にもみられるように、價値は生産價格の論理的先行者でもある。 (もつとも、 生産價格と價値との中間には無數の媒介項が存在している。 たるべき社會的總價 國民經濟全體の運動の初發の大前提 値が價値法則によつて決定される ととろみに いまこの點につ それらはともに價 『資本論』におい

形態の極めて拙劣な素描でしかない。 要するに生産價格は價値の轉化形態であり、 なわち彼は價値法則を商品生産の法則として措定し、彼のいわゆる「競爭の法則」 ける混亂せる敍述をみよ。さきに引用したトレンズ、價值法則が商品生産のみに適應しうることを明確に指摘した 價格との關聯についての問題意識がもともと存しなかつた。リ それはただしい。 古典經濟學最良の代表者の一人、リ しかしかかる機械的區別によつて、 彼はリカードオにおける價値と生産價格との混同にたいして、 を資本制生産の法則として措定した。歴史的事實のありのままの承認とし したがつて逆に生産價格から價値は抽象されうる。 力 ードオ 價値と生産價格との内面的聯關 ·力 はこの抽象に成功しなかつた。 オの『經濟原論』第一章 それは利潤率均等 この區別を明確にした。 いなむしろ價値と生 歴史上及び論理上の 「價値について」に マル クスのみがこ 化の現象

上では存在すべきでない。この法則自體が、生産物の一般的形態としての商品と同じように、 まれた勞働量によつて決定される、けれども資本と土地所有とが形成されて以後はそうでない、 は……商品としての商品に妥當する法則は、商品が資本として、 論證と背中合せになつているところの)アダム・スミスに還る、 の統一と なわち人々が依然としてただ商品所有者及び商品交換者として對立している時には、 リカ が否定される點においてそれはあやまつて ような生産のなかに存在すべきであつて、それの基礎が商品としての生産物の それは初めて全面的に商品となる。だから商品の法則は商品をすこしも生産しない(あるいは部分的にのみ生産 いう辯證法的統一關係において、 オは、資本と賃勞働との分離が またその基礎の上において、はじめて全面的に商品の姿容をとる、 から資本にすすむやいなや、 レンズは、 またその生産の構成分子自體が商品としてそのなかに入りこむことによって リカードオの例外に立脚し いると云わねばならない。 多少の例外はあるが もはや妥當しないということである。 オはそのうちの同一 アダム・スミスは、なるほど『社會の初期』においては あるいは資本の生産物として考察さるるにいたる 彼の法則を否定する。 1 品の價値規定になんらの變化をおよぼさ わば價値と生産價格との區別と同一性 レンズは區別の契機にしがみつく。 定有であるような生産の基礎の 商品の價値はそのなかにふく 他方生産物は、 資本家的生産から抽象 全生産物が交換價値に と答えている。これ 資本家的生

からば價値の生産價格にたいする先行性における歴 史 的 側 面と論理的側面との統一はいかなる點にあるのであ は現實の資本主義生産様式の生産物の支配的で規定的な性格が商品であるという點にある。 このこと

しかもそれはまさにかかる生産には妥當せぬ筈である。」(註一八)

それは 一商品としての生産物という性格と 決定的に區別する點である(誰)九)。 された價値法則の單純な商品生産への適應性がみられる。かくしてまた單純な商品の分析から資本制商品の研究へと のみを抽象して(逆にいえば第二の性格は捨象して)、これを分析したといいうる。 スは、したがつて、『資本論』劈頭においては、 生産の直接的目 價値から生産價格へとすすむということにおける歴史と論理との照應及び統一がみられる。 的及び規定的動機が剩餘價値の生産であるということとともに、 しかし資本主義生産様式の生産物は、 白資本の生産物としての商品という性格とをあわせ有している。 資本主義生産様式の生産物の有するみぎの二つの性格から第一の性格 したがつてここに資本制商品の分析によつて定立 かくして價値法則が定立された。だが いういみにお それに先 マルク いて、

しさ及び價値の諸規定の檢出にかんして歷史的研究がゆたかにそれを裏付けているものと思われる。 研究においてあれほど「抽象力」のいぎを强調したマルクスではあるが、商品から分析を開始するということの正 價値法則の定立が純粹に理論的操作によつてえられるものでないことは注意を要する。

**乃至中世の理論家たちによつて定立されなかつたのであるか?** の當時よりその把提が可能となつたのであるか? ここにこういう反問が生じるであろう。價値法則が商品生産の法則であるならば、それはなにゆえに古代 つばら商品の交換を通して實現すると 商品形態が勞働生産物の支配的で規定的な性格となることによつて社會的總勞働の社會的諸欲望 という問題、これである。 いういみで、 すなわちイギリスにおいてはほぼウィリアム・ペテ 價値法則が全國民經濟における「生産の規制者」

産に特有の法則たること自體を否定するものではない。この點、價值法則の存在過程と認識過程との明確な區別が必 要とされる所以である。 することによつて、それらの檢出が可能となるからである(註三)。けれども、このことは、 となり(註三〇)、 くして價値法則の抽象が可能となるからである。 また價値規定の諸局面が實際的に成熟 なんら價値法則の商品生

貫一氏器 『ソ同盟にお ける社會主義の經濟的諸問題」國民文庫、四七頁。

同、二六頁。

on the Production of Wealth. 1821. p. 19

(誰一一)

(誰一二)

(註一三)

Marx; Das Kapital. Volksausgabe besorgt vom M-E-L-Institut. Bd. I. 1932. Š 69. 長谷部文雄氏譯、

(註一五) F. Engels, ; Ergänzung und Nachtrag zum dritten Buch des,, Kapital". Die Neue Zeit. XIV. Jahrgang, 第八分册、 五五一六頁。

(註一六) 譯、第九分册、二六六頁。

本文三七頁六行目以下及び三八頁八行目以下に引用の兩文章をみよ。 (commonly)必要とされる勞働量が、この商品によつて購買され支配される勞働量を規制しうることをみとめている。 スミスは一般的・通常的勞働時間を以て價値の尺度としている。すなわち、 また、 彼は、 「製造業上の秘密」が長くたもたれるとき ある商品の生産に通例(usually)ある

につい

的及び人爲的)による特別利潤と明確に區別していない。(Wealth. Vol. I. pp. 62-4. 譯、 「特別利得」(extraordinary gains)= を指示しているのであるが、彼はこれを商品の市場價格の自然價格以上への吊 「特別利潤」(extraordinary profits) がもたらされるとのべるとき、それは特別刺 りあげの 第一分册、一二二十六頁)。 一事例として、獨占 (自然

- (註一八) Theorien. Bd. III. S. 80. 林要氏等譯、九三—四頁
- 莊一九) Kapital. Bd. III. SS. 936-7. 譯、第一三分册、一二三八—四〇頁。
- ターリン著『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』、三二頁。) 規定が、また價値による総生産の規制が、生ずる。」(ib. S. 936. 譯、一二三九頁。) 「商品としての生産物という、または資本制的に生産された商品としての商品という、……二つの性格からして、 生産の無政府性、 過剰生産恐慌があるばあいだけである」(ス 「價値法則が生産の規制者となりうるのは 全價值
- 價値法則を以て資本のロゴスとみなしている點においてあやまちをおかしている。 拙著『價值論爭史』(昭和二四年) はこの點の解明にくわしいが、價値法則の存在過程と認識過程との明確な區別を缺

Perce Perce Percent

再び第一節でのベたスミスの見解にもどるとしよう。

をみとめているかのようであることは、 大多数このようにみている(註三)。また、 スミスが價値法則の適應性についてあたかもトレンズと同じく商品生産と資本制生産とを區別して前者にのみこれ 一序説冒頭における次のような章句は、 スミスの本文にみられたところである。後世の經濟學者たちのスミス解釋は クスの解釋も一見このような解釋に類するかのようである。 スの鋭利な洞察を示しており、俗見をしりぞけるのに充分で

ある。

**史の結果としてではなく、** にしていた自然の紐帶その他から解放されてあらわれる。 紀以來あらたに發展した生産諸力の産物である 八世紀の豫言者たちは、 いての彼らの表象にふさわしく歴史的に成立したものではなく、 うまれながらに それはロビンスン物語ではあるが、 な自然主義は、大小のロビンスン物語の假幻であり、 獨立している諸主體を契約によつて關係させ結合させるル 然生活への復歸を表現するものではない。それがこのような自然主義にもとずくものでないこ 六世紀以來準備されて十八世紀にその成熟への巨步をすすめた『市民社會』を見こしている 歴史の出發點として。 十八世紀のこうした個人 オが出發點とする個々の孤立した獵師や漁夫は、 個々人は、それ以前の諸歴史時代に彼を一定のかぎられた人間集團の一 けつして文化史家の考えるように、たんに過度の洗練醇化にたいする い時代にもつきものであつた。」(誰言言 なぜなら、このような個人は、 を、 一一方では封建的社會形態の解體の産物であり、 過去に實在し スミスやリカードオがまだまつたくその影響下にあった 自然によつて措定されたものと思われた た理想として思いうかべていたのである。 十八世紀の、 自然にしたがうものとして、 ソ ただその審美的假幻であるにすぎ の社會契約がそうでないのと同 幻覺をともなわない想像物 他方では十六 からで

もこのような立場からなされている。 課題を掲げるにさいして曰く「種々の貨物を貨幣または他の貨物と交換するに當つて、 スミスによる經濟法則の研究は自然法的思想を背景とするものであり、 「國富論」第一篇第四章のさいごの部分で、 したがつて商品交換の研究において 彼は以後の諸章ではたされる研究 人々が自然に遵守するとこ

これらの法則は貨物の相對的價値または交換價値とよばれるものを決定する。「註一四) いかなるものであるか、私はすすんでこれを研究し このような自然法則の探究

第二次の自然であつた。自然的秩序の上で前者は後者の基礎ない 湾全體の上で、商品生産が資本主義生産との對比上、あなどりがたい比 第五章においてまず價値法則が展開され、 らべてすらいちじるしくより大きな比重 條件となるものがほかならぬ、資本の蓄積と土地の私有との有無ということであつた。 格の法則が展開された所以である。そしてかように價值法則と自然價格の法則とを自然的秩序の上で位置ずけしめ 上でより低い次元に位するものとみなされたのではなかろうか? スミスが「マニュファクチュア時代の包括的經濟學者」(註三)であつたということである。 的、機起的關係というよりは、むしろ同時存在的關係をもつているのである。 獨立の職工一人にたいして雇主のもとに働く ついで第六章乃至第七章(あるいは廣義においては第一一章)において自然 スミスにとつては價値法則は第一次の自然であり、 ものである。 を占めていたということである。 しからばこの二つの法則はいかなる關 すなわち一つは價値法則であ し媒介とされた。 このような解釋をゆるすかのように思われる 職工二〇人の割合である。」(註三七)とのべ この點において想起されねばならぬ したがつてこの二つの秩序 係にあるものとし の時代に

している非獨立の生産者たちもふくめられているとみなければならない。(註三) では

スの偉大さは彼が開明にもより前進的な後者の視點によりすぐれて立脚して、 制度はともに自然的なる同時存在的秩序として、ただ次元の高低を異にするものとしてのみ把握され、かくして前述の スミスの視點における二重性 題を分析した點にある(註三九)。 このためスミスにおいては、 價値法則と自然價格の法則との關係もこのようなものとして把握されたのである。ここに經濟的世界を觀察する 商品生産と資本主義生産との關係が移行の關係として明確に把握されず、 小商品生産者的視點と資本家的視點と上 が看取されるのであるが、もちろんスミ いわば「時代に先がけて」當時の經濟 この二つの

序、なかんずく特権的=及び獨占的商人資本の利益を代辯する重商主義的な經濟政策へ批判の矛先がむけられたと云 スミスの自然法思想が舊い形態でのそれではなく經驗的自然法の立場であるということのいみは、この點にもうか の質現として把握されることによつて、かくの如き自然的秩序にたいする侵犯としての一切の人爲的秩 それはまた彼の理論の質踐的性格とも直結している。價値法則も自然價格の法則もともに

論理はすくなからず。混濁せざるをえない。 だが商品生産から資本主義生産への移行と兩者の決定的區別とがスミスにおいては不明確であるから、 はけつして資本主義社會と内容上相即するものではない。 スミスにおける資本概念が不明 彼のいわゆる「市民社會」(civil society) それらは資本の蓄積と土地の私有との存在を前提 瞭なものをのこしていることはここにのべる あるいは「文明社會」 ここに彼の

勞働者の概念の未成熟さと關聯對應するものである。 は獨立の農民や職工によつて代表される直接的生産者がふくめられている。 マルクスのいわゆる「本源的蓄積」と同一いみを有するものではない。 ひろい擴張解釋をもゆるす概念である。 (より適切に云えば、 はばんみつないみでの資本家ではない。 封建領主をもふくむ。 「資本の蓄積」者「集積者」であり、 スミスのいわゆる勞働者は近代的賃勞働者のみではない。それ がそもそもこのような資本家及び地主の概念の未成熟さは 土地の所有者という。 それには多分に されば、 これは單なる用語上の差異ではなく、 スミスにおける土地所有者中 「資本の蓄積と土地の私有」 「前期的」なものがふくまれ

及び地代と質銀との關係について云えば、前者は後者にたいして自立し對立する所得形態としてではなく、後者の食い 勞働者の概念の未成熟に由來するものであつて、 者の全生産物は直接生産者たる勞働者の所有には屬さず、 られているのであって、したがって、 とした。ここにスミスの所得範疇の曖昧さがあらわれてくる。それは右にのべた近代社會の三大階級、資本家、地主、 カードオにみられる如き かくして、 蠶食として把握されていると云わねばならない。このことは第一節において引用したスミスの本文にもあき と共通の所得源泉に由來するとみなされている(註三二)。 スミスは、 本來ならば勞働の自然的報酬であるべきはずの全生産物からの控除として利潤及び地代が考え 「商品生産の所有法則の資本制的取得法則への轉變」『資本論』第一卷第二二章第一節》をみお をそのままあらわすものではない。 本源的には利潤及び地代は賃銀の一部分であり、この點において支拂われ 利潤といい、 資本家の所有に屬する。 地代といい、賃銀というも、資本主義的所得の形態 しかし現實の資本主義生産過程においては、 ここではとくに剰餘價値の轉化形態としての利潤 賃銀は全生産物價値の分割部分を

壓し下げとしてのみ考えられているのである(誰当)。 生産と資本主義生産との區別點は、所得の面にかんするかぎり、極言すれば、單なる量的區別として、 潤及び地代とは相互に獨立した所得形態である。 はなくして(註三三)、 本質的には勞働力の價値の轉化形態であり、 これらの點はスミスの理解のおよばぬ點である。 このいみで剩餘價値の轉化形態たる すなわち賃銀の それゆえ、

る賃銀勞働者の搾取の制度が存在する場合である。資本主義的生産は、 まるのである。 産諸手段をうばわれた勞働者たちが自分の勞働力を商品として賣りわたすことをよぎなくされているところで、 として市場にあらわれ、 スミスの論理の混濁はここに由來している。本來ならば商品生産と資本主義生産との區別として把握されるべきも 未開の社會狀態」と「市民社會」との區別としてスミス流に把握されたために、商品生産と資本主義生産と これらは二つのちがつた事柄である。資本主義的生産は商品生産の最高の形態である。 これがなければ、資本主義的生産はない」。(註三五) つぎの場合だけである。 それを資本家が買つて生産過程で搾取することができる場合、したがつて國內に資本家によ また事實上 (in der Tat) 混同されている。 すなわち、生産諸手段の私的所有が存在している場合、 生産諸手段が私人の手に集中され、そして 「商品生産を資本主義的生産と同一視して 商品生産が資本 勞働力が商品 はじ

いる社會及び資本主義社會に該當するにもかかわらず、このようなものとしての認識に失敗しているために、 て價値法則が商品生産の法則、自然價格の法則が資本主義生産の法則として把握されるにいたらなかつた。この點 「初期未開の社會狀態」及び「市民社會」とよばれたもののあるべき實體が、商品生産の行われ の社會狀態」を對象とすべき『國富論』第一篇第五章の敍述中に一見資本主義的生產諸關係 した

「勞働の賃銀」等 の混入が見出されるかのごとくに考えられる所以である(鮭三さ)。

めざましく上向的發展過程をたどりつつあつた、 き自然の秩序の展開を過去より現在にいたる歴史的展開として假想したまでである。 てあるべき人間關係の一面を示すものでしかない。されば價值法則にしたがつて交換する獵師と漁夫とは、當 想家であるとともにまた啓蒙主義者であつたことを想起する必要がある。彼はここで啓蒙主義者にふさわしく クスのスミス解釋の一文はこのようなスミスの啓蒙主義者的手法を指示したものである。 者を二つの同時並存的秩序としてとらえたのであるならば、 ような表現様式を根據としているのである。 「初期未開の社會狀態」は文字通り初期未開の社會狀態を示すものではなく、 狀態」とよんだのであるか、 问題がのこる。 スミスがもし、前述の如く價値法則を第一次の自 という問題、これである。從來のスミス解釋中、 市民社會におけるあらたな生産力の擔い手としての獨立小生産者 しかしこの問 なぜ價値法則の行われる社會を稱 自然價格の法則を第二次 ・をみよ。) 段階説を主張 むしろ市民社會 スミスが自 したが 本節冒頭 り

ミス自身のべる如 知の如く一種の經濟發展段階說、すなわち農業 べき自然の秩序と考えられたものを、 『國富論』中にもとめれば、例えば第三篇「諸國における富裕の進步の差異について」において 「富裕の自然的進步」 を示すものである。 (natural progress of opulence) を示するのであり、 は人類經濟史の具體的研究によつてえられたというよりは、 これをゆがめてきた人爲の秩序との對照において展開した 工業 商業という發展段階説をのべている。 「事物自然の成行 それは

は二つの自然の秩序、商品生産と資本主義生産、そして二つの法則、 文明社會」として、 ある。しかもそれらはスミスによつていわば、第一次の自然及びその法則、第二次の自然及びその法則として把握され いるにすぎない。すなわち商品生産の領域は「初期未開の社會狀態」、資本主義生産の領域は「市民社會」または 政策をそれによつて批判するという極度に實踐的目標を有するものである。だから、そこに農業と 本來的マニュファクチュア時代の經濟學者であり自然法學者であるスミスのみた當時のイギリス社會に 見歴史的發展段階にあるかのように敍述されているが、その實、 たな生産力の擔い手である獨立自營農民による農業が含意されていることは云うまでもない ともに「商業社會」(commercial society) のうちにあつて、 歴史的過去に重點があつたのではなく、 ただ資本の蓄積と土地の私有との存否によつて區別されているにすぎない。 各人が交換によつて生活し、ある程度商人となつて 價値法則と生産價格の法則、が存在していたので いて同時並存的に把

スミスをしてこれを不可能ならしめたもの、 者からの論理的發展としてえられたものでもない。マルクスのいわゆる上向法の如きはみられるべくもない とされるとともに、 かくしてスミスにおいては商品生産から資本主義生産への移行、價値の生産價格への轉化における歴史的側面がみ 「市民社會」からの、 ねばならぬであろうが、なによりも抽象されるべきも いることが考慮されねばならぬであろう。 また論理的側面もみおとされてしまつた。すなわちスミスにおける「初 價値は自然價格からの論理的抽象としてえられたものでもなければ、逆にそれぞれ、 抽象の缺如の理由は、もとよりイギリス經驗論という精神史的背景も考 の、商 との ような觀點から クスによつて指摘されたスミ 廣汎な實存 期未開の社會狀

の方法における二面性 大栗的なスミスと小栗的なスミス が理解されうるであろう。

二つの把握の仕方は一 象のうちに表面的に與えられているような、したがつて、ブルジョア的生産の過程のうちに實際的に囚われており利 害をもつているものにとつてとまつたく同様に、 ては平氣で並存しているばかりでなく、交錯し、そして絶えず矛盾している。「鮭四〇) し、分類し、物語り、そして圖式化するような概念規定のもとにもたらすにすぎないものであるが、 「スミス自身は非常な素朴さをもつて絶えざる矛盾のうちに動いている。 あるいは、 他のひとつは生活過程において外面的にあらわれることを、その顯現し現象するがままに、ただ記述 ーそのうちのひとつはブルジョア的體系の内的聯關のうちに、いわばその生理學の**うちに突**入 ブルジョア經濟體系のかくれた構造を追求する。他方では、彼は、その傍に、競爭という現 非科學的な觀察者にとつてあらわれるような聯關を併置する。 一方では、 スミスは經濟上の諸範疇の内 ースミスにおい この

(註二二) リスト 學史』、一二五頁以下)、森戶辰男、笠信太郎兩氏(共著『剩餘價值學說略史』、八〇頁以下)は、 舞出長五郎氏 (『經濟學史概要」、上卷、一四三—四頁)、 ローゼンベルグ(『經濟學史』、直井武夫、 (Gide et Rist; Histoire des doctrines économiques. 1947. p. 85.) = - > (E. Roll; A History of 1906. S. 138.) 1945. p. 160, 163.) ープクネット (W. Liebknecht; Zur Geschichte der Werttheorien in England カウラ (R. Kaulla; Die geschichtliche Entwicklung der modernen 波多野鼎氏(『正統學派の價値學説』、九一一〇頁)、久留間鮫造氏(『經濟 **廣島定吉雨氏共譯、第一卷、三一六、三二二、三二四、** とのような段階説的解釋に立脚 四四七頁)、

(社二三) Kritik. S. 216. 譯、二七一一二頁。

(註二四) Wealth. Vol. I. p. 30. 譯、第一分册、 六四頁。

(註二五) 會體系一 四五.

(註二六) S. 365. 譯、第三分册、五八一頁。

(註二七) 譯、第一分删、

(註二八) 内田義彦氏著『經濟學の生誕』、 二六一頁。 藤塚知義氏著『アダム・スミス革命』、五三頁。

示すに充分である。日く「從屬ほど人間を腐敗せしめるものはなく、しかしこれに反して、獨立は人々の正直をさらに增進する 商品は需要に應じて生産されるであろう。」 は自己の勞働の自然價格を得たのである。もし人がこれを得るならば、その場合は勞働者に對する充分な奬勵があるのであり、 民衆は他のいかなる場合よりもよい賃銀を得、その結果として一般的に誠實な態度が全國 に 行き わたる。」(Lectures. pp. とるだけ彼が永生きしない危險、 「自然價格」イークオル「勞働の自然價格」とみなす規定のうちにみられよう。日く「ある人の得たものが、 値論の存しないととに注意すべきである。)またかくの如き自然價格論に立脚する次のような高賃銀論もまた彼のかかる視點を E. Cannan. 1896. p. 176. 高島善哉、 スミスの『國富論』以前における視點は、 Scott; Adam Smith as Student and Professor. 1937. 所収 P. 345. 水田洋氏譯、一〇二頁。)(とこにはなんら 商工業の樹立はとの獨立をもたらすものであつて、 その使用するすべての人に充分な給料を拂いうると のやなければならなら。」(A. Smith; An early Draft of Part of the Wealth of Nations. 充分長生きしないかもしれずまた事業に成功しないか および、それだけ永生きしたとしても、その職業で成功しない危險をつぐならという、以上の 水田洋雨氏共譯、三四三頁。)又曰く「勞働者を、 (A. Smith; Lectures 第二に、その特定の仕事にたいする彼の敎育費を補償し、第三に、とめ補償をうけ はるかにより 犯罪を防止する最善の治政である。そうすることによつて、 一層小商品生産者的視點 にちかいと云える。 勞働は高價となり製品は安價となる。 いう、社會の一般的富裕の證據だと、 on Justice, Police, ある種類の産業に専心させるの Revenue and Arms. edited かんがえられるべきで 勞働する間彼を維

「初期未開の社會狀態」について

富裕の觀點がうかがえる。拙稿「『生産的勞働』について」本誌、昭和二七年五月號、四四頁(註二六)をみよ。 なされるべきである。……國の富裕とは國民全體の富裕であつて、それは、勞働の報酬が大きいことにより、 生ぜしめうるものに他ならな (Draft. p. 332. 會の富裕が本來そとに存するところのその 六三頁。)ととにはまた、 また、 彼におけ したがつて

- Entwicklung der modernen Werttheorien. 1906. SS. 183-4.) とか、「ともかく、アダム・スミスは、 國民經濟の理想的原始狀態とは別個に取扱つている。」(ib. S. 140.) とかのべるカウラは、あやまつている。(傍點A) (Urzustand) が先験的仕方で組立てられている。」(R. Kaulla; Die geschichtliche 現在の價値問題を
- (註三二) up)、二つの優越な階級の人々が劣等な階級の人々を壓迫する。」(Wealth. Vol. II. p. 67. 譯、 なお次の一句をみよ。「他の諸國「植民地以外の諸國―A」においては、 地代と利潤とが賃銀を蠶食してしまい 第三分册、二五七頁。) (eat
- (註三二) ろの變化-て、自己の論題に外觀上の統一を保持させた。スミスは價値の生産における利潤及び地代の分前はとれをみとめざるをえなかつ 解消させるだけの力がないと のち彼はそれを價値の源泉とみるかたむきがある。……しかしスミスはこの説明が彼自身になされるにちがいない反對論を 彼はそれを賃銀の先取であり、 テュルジョンはスミス 價値論の一貫性の根據をこの 點にみ止めている。曰く「スミスは人間勞働をはじめ價値の尺度と A」をひじように巧妙に目立たないようにした、 すなわち地主と資本家との貢献を 大いに過少評 價するこ とによつ français. 1921. pp. いうことをみとめるのに躊躇しない。……彼は變化「土地の私有と資本の蓄積との出現によるとこ それだけ賃銀を減少させるものとしてのべている。 勞働に本源的重要性と卓越した職能とをとつておく。 いる。 (C. 今日でもなお、 Turgeon et 價値の主要因としてとどまる。 C-H Turgeon; La Valeur d'après les Economistes 彼は生産の二つの派生的能因 かくして、 との巧妙 價値をして生産費をも 7土地と
- (祖三三) Marx; Lohnarbeit und Kapital. 1891. SS. 13-4, 26-7. 宮川賞、高山洋吉兩氏共器『マルクス・ エンゲ

ス選集』第二卷上、二三三―四頁、二五二頁。

(註三四) 内田義彦氏著『經濟學の生誕』、二七二頁。

(註三五) スターリン著『ソ同盟における社會主義の經濟的諮問題』、二一頁。

(註三六) 高島善哉氏著『經濟社會學者としてのスミスとリスト ۲ 一一五—六頁。岸本誠二郎氏著『勞働價值說 Ø 研究。 五. 五.

(註三七) 一〇頁、 高島善哉氏著『アダム・スミスの市民社會體系』、二二五―九頁、『國富論講義』第一分册、四 『經濟社會學者としてのスミスとリ スト 一二三八頁。 九 一五○頁、第三分册、

(註三八) 高島氏編『國富論講義』第三分册、三―一九頁。內田氏著『經濟學の生誕』、 四〇 一四頁。

のである。 體が經驗的になつた。 た。じらい社會科學にたいする要望は强力にたかまつた。スミスの時代には、人は生成せる狀態を『根が Wieser; Der natürliche Werth. 1889. Vorwort. SS. III-VI.) は、スミスの論理における上向法の缺除の一面的把 しかもとの二つの理論は混亂している。彼の見解によれば、「哲學的」理論はあやまりであつて、「經驗的」理論がただしい スミスの價値論に「哲學 彼の立場は經驗主義である。 その後における價値論無用説し 信憑すべき狀態の經驗からひきだされない證據を哲學はなんら許容しない。」(ibid. S. VI.) ヴ 狀態からあきらかにし、 的」(philosophisch)及び「經驗的」(empirisch) **|「經驗科學」主義の立場にたつところの** によれば 「リカード 且つそれで滿足した。我々は現實を現實から說明しようと欲する。 オの書物の刊行されてから今や牛世紀餘、 價値法則は「哲學的」理論であり、 の二要素を見出すヴ -への道をひらいたものであると云えよ 自然價格論は「經驗的」理論であ 的』人間本性及 世紀以上經過 哲學それ自 イーザー Ó

る價値論の發展の理解に資する最大にして唯一の貢献であるという。 の見解は、スミス及び リカー オの理論に關する眞實の解釋たるのみならず、 (A. C. Whitaker; History and Criticism of イギリスに

やゆる「初期未開の社會狀態」について

the Labour Theory of Value. 1904. p. 12.) すなわち、 における中心的思想は、投下勞働が價値の本質であるということである。それははじめ確認のために讀者の內省的判斷に訴える。 とれが『經驗的』説明である。との發見された原理は、企業家費用の法則としてしられている。」(ib. pp. 13-4.)「『哲學的』説明 地の地代に合致する傾向があるということは、 ばこの兩者が經濟學の方法における上向法のうちに統一されなければならぬのに、その不統一、混亂を呈していることこそ批 競争の傾向である。」(ib. p. れによつて『哲學的』説明が例證される原始の社會狀態は全く想像的なものである。『經驗的』説明は外面的に觀察された市場 ゆる「哲學的」理論はスミスにおける本質洞察的方法、「經驗的」理論は現象記述的方法を示すものにほかならぬ。さ ない平等な獵師や漁夫が彼等の勞働の生産物を日數で測定して交換する。け 及び價値測定の理論(theory of value measurement) の困難がうまれてくる。 一を去り他をとるのは、 商品の交換價値が、その生産物を獲得するのに支拂われねばならぬ勞働の賃銀、資本の『利潤』及び 「哲學的」及び「經驗的」說明が區別されることなしに混亂したかたちでふくまれている。これがた 14.) しかし、 この哲學の彫琢と例證とは、 つねに原始的及び 『自然的』 社會に到達する。 「『哲學的』説明は近代の經濟學の父たちが價値の一般的謎、その窮局の性質すなわ との種の解釋のあやまりは、 事物の本質についての思索と對照的な事務上の經驗の事柄としてみなされる。 スミス以上のあやまりをおかすものと云わねばならない。 勞働價値説は 本文にのべたところよりして推論されるであろう。 れども、 そして前者には二つの別個の説明 規制の理論(theory of ととでは

の分析が單純な商品生産關係の分析から出發すべきことを知つていた。 もちこまれているのは單なる概念の混亂によるものとされる久留間鮫造氏の見解(同、一二六―七頁) スミスの「原始的社會」を以て「社會 この單純な商品生産の關係を考察しているのである。」 『經濟學史』 一二五 「スミスは正常にも、 資本家的生産が商品生産の發達の結果であることを知つており かくして彼は、 さきに引用した『國富論』の第五章に 六頁)とのべ、 「社會科 には、 第五章に賃勞

疑義の存するところである。

第七分册、四九二―三頁。價值構成說に關聯して、 ij SS. 391-2. 譯、 同 五〇七 に關聯して、Kapital. 八頁參照。 Bd.

にそくして檢討したいと思う。 ちスミスのおかれた時代及び彼の方法に關聯して說明してきたが、 スミスが價値法則の適應性を「初 未開の社會狀態」に制限した理由について、 なおここに内在的に、 我々はいままで超越的 すなわちスミスの經濟理論 すなわ

文章においては、 法則を基礎にして利潤、地代等の不勞所得の發生が充分成功的に說明されなかつたということである(incl)。 は利潤及び地代を勞働者の勞働の成果である生産物からの控除としてみなしているのである。 ん彼はかなりこの問題を積極的に解明してはいる。 値生産物の分割の問題としてとりあげられている。 いて注目されるのは、スミスによつて剩餘價値論が確立されなかつたということ、詳言すれば、 なお素材的視點に 立脚していることをまぬかれない。だが 次の文章(同じく第一篇第六章)において すでに第一節において掲げた文章においてみられる如く、 しかしそこに引用した スミス もちろ

活資料とを供給して仕事をなさしめ、彼等の製作物の賣却によつて、または、その人々の勞働が原料の價値に添加「資本が一度び特殊の人々の手に蓄積されるや否や、彼等のあるものはその資本を用いて、勤勉なる人々に原料と 「初期未開の社會狀態」 を得ようとするのは自然であろう。そしてその完成した製造品を、 について 勞働または他の貨

大三 (宝九三)

どまり、それによつて雇主自ら得るところがないならば、彼はこれらの人々を傭うべく何の興味ももたない筈である ることについて彼は何の興味ももたない筈である。」(註四二)。 もしも彼の利潤が彼の資本の大きさに對して一種の比例を保たないならば、 分に分解する、すなわち、一部分は彼等の賃銀を支挑う、そして他の部分は雇主が前貸 が與えられなければならない。それ故に、 する利潤を支挑う。 投ずるこの事業家のその利潤として、 もしも彼等の製作物の賣却が資本を同收するだけにと この職工たちが原料に添加するところの價 原料の價格及び職工の賃銀を支 小資本よりも大資本を用い

右の文章中には後述の如き剰餘價値論と對立する見解も含められているが、ともかく價値分解說が明示されている 更に第一篇第八章中には次の如くのべられている。

ゆる工藝と製造業とにおいては、 た結果、その原料に附加された價値の分前に與かる、そしてこの分前こそ彼の利潤である。」(鮭四) 「殆どすべての他の勞働の生産物もまた、 職工の大部分は、 右「農業生産物」 彼は彼等の勞働の生産物、 彼等の仕事の原料と、 A」と同様の利潤の控除を受けるのを觅れない。 言い換えれば、その原料を用いて勞働が行わ その仕事が完成するまでの賃銀と生活維持 あら

潤との價値を附け加える。 第二篇第三章に曰く「製造工の勞働は一般に、彼が工作する材料の價値に、 主人には一文の費用もかからないのである。」(鮭四五) 彼が勞働を加えた對象の増大した價値の内に、 ……製造工はその賃銀を彼の主人から前貸して貰つているのであるけれども、 一定の利潤を伴つて囘收せられるのであるから 彼自身の生活維持手段と彼の主人の それらの賃

らのものは、農業者の資本及びそのすべての利潤以上に、 勞働者の如く彼等自身が消費したものに等しい價値、 する利潤とともに、再生産するのみならず、それよりは遙かに 一章句を引用すれば、 第二篇第五章に曰く あるいは、 彼等を雇傭する資本に等しい價値をその所有者に 「農業に使用せられる勞働者及び役畜は、 値を再生産するのである。 すなわちこ 製造業

このことの成果を表白しているのであるが、しかし彼には、 こととなる。けれどもスミスには剰餘價値の論理そのものがない。彼には一定量の價値である貨幣がいかにして生産 第五篇第一四章) ことによつて、いわゆる「本源的蓄積」をいみし、 原料(=不變資本)に附加する價値は、 て、いわば勞働力の使用價値と價値との乖離によつて、剩餘價値が生産される。 えられる。元來、生産過程に先行して流通過程において資本と交換されるものは、勞働ではなくして勞働力である。 におけるほどでないにしても 一程において自己を増殖して資本に轉化するかがあきらかでないのである。 これらの章句 かも兩者は價値法則にもとずいて交換される。 の論理が缺如している。へもつとも彼には他面、 を指示していると云いうるであろう。 (及び第一節引用の章句)によつて我々はスミスが「資本のもとへの勞働の形式的包攝」(『資本論』第一卷 むしろ流通過程の觀點から把握され、 的 剩 餘 價値の生産をみとめているらしい個所もあるが。) 賃銀(=可變資本)と利潤及び地代(=剩餘價値)に分割されるとのべるとき、 しかも生産過程において勞働者が必要勞働時間以上に働くことによ 「市民社會」「文明社會」の語によつて資本主義社會をい かくして事實上、 勞働の生産力の増進— 資本の流通過程(G-W, W-G)が媒介される生産過程 スミスは「資本の蓄積と土地の私有」という いわば勞働と資本との不等價交換としてと 彼にとつて剩餘價値の生産は-「資本のもとへの勞働の實在的包攝」「『資 スミスが前引の文章において勞働者 かくして、 スミスには貨幣 ーマルサ みする

購買しうる勞働量によつて測定されるとみなざれる。 その差額が剩餘價値となるかの如くに考えられる。 轉化が勞働と資本との不等價交換によるものと映じ、 は購買しうる勞働量に依存するとみなされる。 かくして資本價値の增殖率はそれによつて支配しうる なわち資本家は購買した勞働の對價を價値通りに 資本としての商品の評價は、それが支配

ぎりでのみ價値の尺度たりうる。 投下勞働量ではなくして支配勞働量であると宣言される。これが原理となる。 念の混亂のゆえに、それは一轉して消極面を露呈せざるをえない。商品流通と資本流通との混同及び生きた勞働と對 れば次の如くである。 ここにスミスの支配勞働價値說の眞意が見出される。それは支配勞働價值說の積極面である。しかし、 。それゆえ、投下勞働量による尺度は、 生きた勞働による評價が對象化された勞働による評價にまで擴充され、 た勞働との混同がこの場合、 但しそれは資本の蓄積と土地の私有とのおこなわれている市民社會にはみとめがた 致命的である。 初期未開の社會に放逐されざるをえないであろう。この間の事情を詳言す すなわち資本としての商品の評價が商品としての商品にまで糖 投下勞働量は支配勞働量と合致するか かくして一般に商品價値の尺度は スミスの概

投下されている勞働量以上の勞働量、 視がある。(これは簡單に云えば勞働と勞働の價値との混同視というひとである。更につきつめれば、スミスは勞働の生産物イ 通にさいして、 勞働と資本との不等價交換ということ に投下された 勞働を超過すると 投下勞働量は支配勞働量と合致しないのを通則とする。 しかも對象化された勞働量を支配するということによる。とすれば、一般に商品 いうこと すなわち支配あるいは購買される生きた労働が資本 が一般の商品流通にまで擴充されるとなれば、 しかもスミスにおいては勞働と賃銀との混 へとしての貨幣また

ではあるが まさに利潤及び地代の源泉(價値源泉)であるとみなされる。ここにみられるものは、スミスが批判した重商主義の讓 働量を超過しているとすれば、そして支配勞働量によつて商品價値が尺度され、規定されるということで あれば (ス 渡利潤説、販賣にもとずく利潤の發生の説明にほかならない スには價値の實體概念がないので尺度と規定とは同一視されている)、この支配勞働量の投下勞働量にたいする超過量こそ 潤及び地代部分はどうしても他からその源泉(價値源泉)を見出さざるをえない。 めよく、 〔=對象化された勞働〕とが混同視されているとすれば、當然ことに勞働 = 勞働生産物 そこで商品に含められている勞働(かかる勞働によって形成される價値)は賃銀のみを同收するにとどまり、 ともかく剩餘價値の起源を説明したスミスも、 多くの概念の混亂によって、悪戰苦闘、刀折れ矢つきて この點、マルサスと共通であつて、 しかも、 賃銀ということになるのではな もじ支配勞働量が投下勞 稚拙な表現

に足るものに相異ない。」(龍四九)。なお第一節に引用したスミスの二つの文章(三八頁八行目以下及び三九頁一〇行目以下引 勞働の生産物は、その産出、 かくしてスミスはいう。「その交換價値が勞働<賃銀とすべきだ。 大部分の商品の價値のなかには地代及び利潤が貢獻するところが多いのであるから、 精製及び市場への搬出に使用した勞働よりははるかに多量の勞働を購いまたは支配する A」のみより成る商品の數は、 文明國においては その國の年々の

第一節において指摘した如く、自然價格論が支配勞働價值說とむすびついて主張されることとなり、 價値法則とは全然獨立の命題となる。 すなわち價値分解説にかわる價値構成説となる。

|及び「三位||體的範式」(『資本論』第三卷第七篇第四八章)が大きな役割を演じることはいうまでもない。 大乘的なスミ とは いつし わば生産費説である(註五〇)。この場合、スミスにおける他の概念の混亂 か消えうせて、 それはブル 獨立の自然價格の法則によつてとつてかわられる。價值法則は、當然、 小乗的なスミスが前面にあらわれてくる。 アたちの失われた樂園においてのみ市民權をあたえられる。 逆に賃銀、 利潤及び地代が價値を構成するという見解、 剩餘價值論は讓渡利潤說に墮落し、 資本主義社會以前へ放逐され 値と利潤と平均利潤との無差 價値法則は ے れであ

越すら見出している。 たと解しえなかつたことはいうまでもなかろう。 發生を説明しており、 つきとめ、 マルクスはこの點を高く評價し、多くの混亂にもかかわらず、 スミスにおけるこのような「重要」な諸矛盾にかくれた「ただしい本能」を異常な嗅覺によつてかぎ出 かもこれを批判的に攝取しえた點にあると云えよう。 したがつて、そのマルクスが單純に、 したがつてまた價値法則が資本主義社會の生理學において重要な意義を有することをみとめ いつたん、後景へしりぞいたはずの大乘的なスミスは價値法則を前提として剩餘價値 マルクスによつて價値法則における歷史と論理との統一がな スミスが價値法則の資本主義社會における意義 ときとしてリ カー ドオにたいするスミスの優 を否定し

(組図 1) E. Roll; A History of economic Thought. 1945. p. 165.

(註四二) Vol. I. p. 50. 譯、 一〇一一二頁。 傍點はエンゲ 第二卷序文中

(註四三) くおしい批判は、Theorien. Bd. I. SS. 138-42. 譯、一五一—四頁參照。

(註四四) Wealth. Vol. I. p. 67. 譯、第一分册、一三二—三頁。傍點A。

(註四五) ib. p. 313. 譯、第二分册、一〇五頁。傍點A。

(註四六) ib. pp. 348-4. 譯、第二分册、一六〇頁。傍點A。

(註四七) Rist; Histoire des Doctrines économiques. 1947. p. 86.) 反して、資本家が自分のために勞働の收益にたいしてなす「控除より生じる、かくして勞働者は彼によつて創造された價値の全部 以上に商品に支拂うととを同意しなければならぬととから生じる。 は剩餘價值説一本の立場に立脚する。例スミスは利潤を監督・指揮勞働の賃銀とみることを拒絕している。(E. Cannan; A からの一控除として映じたといつてよかろう。ベーム・ の立場は完全に中立的であると、ベー 受取らず、これを資本家と分かたねばならない。この説明によれば、資本利得の源泉は、勞働によつて創造された價値の留保さ る部分たるであろう。 したがつて、 「スミスはこれ Theories of Production and Distribution. 1924. p. いは質銀からの質質的控除である。」(ib. p. 201.) ()なぜ、かかる控除に勞働者はあまんじるか?「アダム・ **勞働によつて創造された價値以上への生産物の價値增加たるであろう。第二の説明によれば、** スミスの利潤起源論には、剩餘價值論と讓渡利潤說との二要素がみとめら (Böhm-Bawerk; Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien. 1921. SS. ムはみている。 (ib. pp.201-2. (ib. S. 65.) この解釋はリストによつては肯定されているが(Gide バヴェルク博士の信じるところでは、アダム・ A」につい 生産の材料をもたぬために服しなければなら との説明によれば、資本利子の源泉は、一つの ャナン、ツッカー てさまざまの箇所で二つの相互に矛盾 な お 200.) 何スミスによれば、 た勞働を ルは異説をとなえている。キャ スミスはまたしばしば ぬところの勞働の生産 ム批判をみよ。 し彼が引用する諸 利子はこれに 62-3.) x = 別に明瞭な あたえて 90

て生産物價値の超過によつて利潤の發生は説明されて Theorie des Preises. 1936. SS. 247-52.) 彼は利潤をスミ れている。 15 いと解するが、 スが賃銀のおしさげによ ح 0 つてうまれるとみていたと解し、し おける労働=賃銀の範式がみおと たが 9

anglais et français. 1921. pp. 62-8.) Werttheorien. 1906. SS. 138-9.) しかし、支配勞働説に立脚するかぎり、 の內在的尺度と外在的尺度との區別のいぎを理解しないで、安易にスミスは資本主義社會についても價值法則の妥當性を信じて 利潤につ カウラは支配勞働説にスミスが立脚して、賃銀のみならず、利潤、地代もまた勞働によつて尺度されるよいうことから、 い。テュルジョン いて剩餘價値説的に解しているとのべている。(R. 内在的な理解ではな はスミスにおける投下勞働說と支配勞働說との區別のいぎを理解せず、更に價値の規定と尺度、價値 et Kaulla; Die CH H-O Turgeon; 直接的には、 geschichtliche Entwicklung La Valeur d'après les ムの解する如く譲渡利潤説とみる der modernen Economistes ス・ミ

譯 四八 一三四、一三〇 Theorien. Bd. I. S. 136, 一一頁。 140-3, 151-2. 一四八一九、 一五三一五、 一六二頁。 Bd. **T**1. Ś 115, 120-2.

(註四九) 頁。 Wealth. I. p. 56. 譯、第一分册、一一二頁。その批判 Bd. H 1 129. 一二六一七

(註五〇) その批判 第一三分册、 Kapital Bd. 11011, 一二一四十五、 一二二一一三四頁。 第七分册、 九九 五〇〇、五〇四頁、 Bd.

―一九五四・二・一九・稿

# 資料

# 勞働者意識についての若干の問題(上

四工場の調査を素材として

市 沼 吉 松

につ M市のN工具、 としている。(1)これらの工場は各種の面で相違點をもつてお る社會緊張の研究」産業勞働班 の相違がある。これらを比較、 題をとりあげようとするのが、 この 面接法によつてそれを補張するという形でなされた。(2) かつ工場内部においても職員 いては後述に委ねる。 (勞働科學研究所) 昭和二八年三月に實施さ 研究がいかなる見透し或は假説をもつて着手されたか がなる面を、どのような形で問題にしようとして 自動車とY毛織との調査は、昭和二七年度「日本におけ なお、この調査は質問紙法を軸とし 場を對象としてなした調査を素材 しながら、勞働者意識の若干の 本論文の意圖である。勞働者 れた。 (班長尾高邦雄教授)の一部 工員、 (東京大學) これらの調査は三核幹 東京都内のY毛織、 兩氏及び筆者 --平勞組員 いる

> の協同研究の成果の概要は報告されたが、 よつてなされた。質問紙の配付、 したものではな 兩氏はY毛織を、 かる形での資料の利 筆者はI自動車 筆者の見解を强く 從つて分析未熟の責は筆者の 動車の調査には本塾大學 蒐集等につ 本論文はとの報告 を分擔した。 用を許諾さ いて 多少 ح

林康志君の協力をえて、昭和二八年九月に行われた。の一部として實施された。とれらの調査は本塾大學院學生小科學研究助成補助金をえてなされた「三條市の社會的研究」新潟縣M市のN工具とK戸車の調査は、昭和二八年文部省

(2) Iの從業員約四千のうち三三三を、Yのそれ約一千四百名を抽出して、豫備調査をなした。 なお本調査に入る前に、1で約百百のうち四七を抽出し、それらについて質問紙調査を行つた。 のうち三二六を、Nのそれ約六〇のうち四五を、Kのそれ約のうち三二六を、Nのそれ約六〇のうち四五を、Kのそれ約一千四百名を抽出して、豫備調査をなした。

異るが、敷名乃至二〇名程度である。輝するか等に重點を置いてなされた。面接者の數は各工場で面接は質問項目の檢討、量的に表現されたものをいかに解

勞働者についての社會心理的問題は、彼らが置かれている社

七一(四〇一)

勞働者意識についての若干の問題

 $\widehat{\mathbb{F}}$